

『松山集』解釈と鑑賞

Interpretation and Appreciation on "Shōzanshū."

蔭 木 英 雄

(一)

『松山集』は龍泉令淬すゐの詩文集である。龍泉令淬の経歴については不明の部分が多い。わかっている部分が少ないと言った方がよいだろう。その出生からしてヴェールに包まれているのである。『延宝伝灯録』卷十二に、

後醍醐帝の落胤なり。母、一神人有りて身に甲冑まがらみを攘はらひ手に宝塔を捧げ、光を放ちて身に触るるを夢み、寤まめて娠はらむ。既に出でて源氏某に賜ひ、尾の海東郡に生まる。

と記されているが、確証はない。後醍醐天皇には皇子が多く、『太平記』には十六人、『本朝皇胤紹運録』には皇子十八人、皇女十八人と記している。しかし確実なことは不明で、御名すら確かめられない皇子が多いのである。まして、源氏某の子として海東郡に生まれたのであるから、記録に留められなかったのは当然であろう。

『松山集』解釈と鑑賞

貞和二年（一三四六）春、十九歳の後村上天皇は龍泉に詩を賜い、海東の牡丹を求められた事があった。その時、龍泉令淬は御製の韻に和して、

夢は春閨に破れ 塵事空しく 夢破春閨塵事空
芳心一点 遠く相ひ通ず 芳心一点遠相通
同根知りぬ 是れ天地在るを 同根知是在天地
花は開く 南山と海東とに 花開南山与海東

(訳)

春のねやで夢から醒めると俗事は空しく思われ

(丁度その時) 美しい大御心の詩が届き遠く離れても心が通じあいました
この天地に同じ根から生まれた 帝と拙僧

(同根の) 牡丹も南山吉野と海東とに開くでありますよう。

と奉答した。これはまだ楠木正行は健在で、南朝の勢の悔り難い時であった。第三句の「同根」は牡丹をさすと共に、後村上天皇と龍泉令淬とが、御兄弟である事を示すものである。

南朝主に上るたてまつ

北斗以南元一人

北斗以南元一人

雲開く天野に城闕聳ゆ

雲開天野聳城闕

只だ金合裡の頭物を拈じ

只拈金合裡頭物

仰ぎて 吾が君万々の春を祝ふ

仰祝吾君万々春

起句は『唐書』狄仁傑伝の、仁基曰、狄公之賢北斗以南一人而已、に拠る。これは則天武后の宰相の狄仁傑の賢が天下第一であることを言っているのだが、この詩では北斗即ち北朝に対して、南朝の上御一人たる後村上天皇をさしているのだろう。承句の、天野は言うまでもなく河内の天野山金剛寺である。後村上天皇は正平九年（一三五四）十月廿八日に賀名生から天野に行幸され、同十四年廿三日に観心寺に遷幸されるまで金剛寺に滞在されたのである。転句の金合（金の箱）はもちろん金剛（寺）に掛けているのだし、裡頭も内裏の意味を含ませている。一首を口語に訳すと次のようになるだろうか。

天下に御英明なのは南朝の上御一人

雲晴れる天野山に皇居の御門が聳える

ただ金剛経の真理を体して金剛寺におわすお方を

仰ぎみて吾が君の方歳をお祝いする

南朝の衰勢の中にあつて、龍泉令淬は後村上帝の千代万の御繁栄を祝い願っているのであり、この詩も彼が後醍醐天皇の庶子であるという傍証となりはしないだろうか。

母を哭す

撩乱たる繁系 散じて収まらず 撩乱繁系散不収

十分の消息 眉頭に在り

十分消息在眉頭

空桑葉落ちて 風 蕭瑟

空桑葉落風蕭瑟

一抹の斜陽 幾度か愁ふ

一抹斜陽幾度愁

龍泉の母がどういいう人であったかは全く不明だが、右の作品は母が亡くなった時のものと思われる。起・承句の意味は充分理解できぬ。繁系」というのは、第三句の空桑（瑟の名）から考えると琴瑟の絃のことだろうか。『唐律釈文』によると、大功の喪有る者、其の琴瑟を按じて以て哀を助くるを謂ふ（傍点筆者）という文章があり、龍泉は母を喪った哀しみを深める為に琴瑟（空桑繁系）を撫すのである。承句の眉頭は誰の、眉のあたりなのか。瞑目した母の死顔か、それとも龍泉の眉か。私は両方を含めると解したい。消息は時の移り変りの義である。この詩の眼目は転句にある。空桑の語には、(1) 瑟の名、(2) 僧侶（ここは龍泉自身をいう）、(3) 孔子の生地（善木を産し琴瑟を作る）、という意味のほかに『呂氏春秋』に次のような話がある。殷の賢相の伊尹の母が伊水のほとりで孕んだ時、夢に神のお告げを受けたが、それを実行しなかったので空桑と化してしまった。後に有佚氏の女が桑を摘んでいる時、この空桑の中から嬰兒を發見して其の君に献じたというのである。龍泉令淬は自分の出生の秘話をこの空桑伝説からませているのであろう。空桑葉落の四字は身籠ったまま源氏某に嫁した母の死を意味すると共に、空桑僧侶たる自分の落魄をも暗喩しているのである。以上のことをふまえて「哭母」を口語訳すると、

乱れ奏でる琴の音は空しく消え

時の移り変りは眉の辺まがりに充分うかがえる

桑の葉は落ちて 秋風さびしく

「はけで画いたような落日に向かい 愁いに沈む

となる。結句の「一抹」は、琴の演奏の時、弦をおさえて抑揚をつけることをも意味し、空桑の縁語となっている。このように訓んでみると、縁語・故事を内包したなかなか巧みな作品であり、「散」「空」「蕭瑟」「葉落」「斜陽」「愁」の用語はすべて母を亡くした悲しみを表現している。

龍泉令泮が尾張国海東郡の出身であることは、「洩上人の洛陽より海東に来るを謝す」「京の万寿を辞し海東に帰る」という詩題が、薄弱ではあるが傍証となる。海東郡に居住する源氏某、つまり龍泉の養父は如何なる人物であろうか。それを教えてくれる史料が見当たらないのが残念である。龍泉令泮が生まれ故郷の海東郡で落ち着く所といえ「海東の瑞松より万松山円通に遷住す」「万松より瑞松に遷り、口占一首」という題によって、瑞松院であったことが分る。

『延宝伝灯録』によると、乳母が仏教に深く帰依し、しかも仏理によく通じていたので、龍泉はその教えを受け、衆生本実相を具すとを理解し、虎関師鍊に参侍するようになったという。

円通にて雨に阻はまれ友人に寄す

少年 此に在りて師窓に学びしも 少年在此学師窓
今日帰り来れば 事同じからず 今日帰来事不同
広脇山中の老尊者 広脇山中老尊者
雲を興し雨を致し 神通を展ぶ 興雲致雨展神通

『松山集』解釈と鑑賞

円通とは東福寺西にあった三聖寺の開山塔方松山円通広脇寺で、虎関の師の東山湛照の塔頭である。起句によって、少年時代に円通寺で虎関に学んでいたことが分る。『海蔵和尚紀年録』（龍泉令泮編）によると、虎関が円通寺に住していたのは、正中元年（一三二四）四十七才の四月十一日から、嘉暦元年（一三二六）十月に三聖寺に遷るまでの二年余りで、龍泉の少年時代の起句の思い出はこの頃のものである。又、兄弟ひょうだいの東川弁汨べんぼくにあてた「答汨侍者書」の中でも少年時代のことを次のように書き送っている。

昔、某またも也幼く且つ愚かなりき。嘗て謂まへらく、「博く講肆し（書を講ずる場所）に遊び、旁らに経史を括くね、（五経や史書を研究し）生きては空言を託し、死しては其の文を伝へん」と。今や志衰へ力羸よる。当代の碩学の僧虎関師鍊に侍して、向学心が旺盛であったのである。以下、龍泉令泮及び関連事項の略年譜をあげておく。

元弘二年 (1332)

△三月後醍醐天皇、隠岐に遷幸。
五月、虎関は再び「元亨釈書」を光厳帝に奉る。
九月二十日、虎関、東福寺の住持となる。

三年 (1333)

△五月、鎌倉幕府滅亡。
十一月、虎関、達摩忌を明極楚俊や清拙正澄に勧める。

建武元年 (1334)

正月四日、東福寺炎上。

春、龍泉は済北庵に住す。

延元二年 (1337)

十二月、虎関、東福寺を退き済北庵に帰る。
四月八日、虎関、三聖寺を退き東福寺に再住。
八月、北畠顕家が再び西上の途につく。

暦応二年 (1339)

三月十四日、虎関、南禅寺住持となる。

『松山集』解釈と鑑賞

四年 (1341) 正月十八日、虎関兩禅寺より海蔵院に退く。
六月以降、北畠親房常陸に転戦。

貞和二年 (1346) 春、瑞松院で後村上天皇に和韻し、牡丹を奉呈。
七月二十四日、虎関師鍊示寂。

四年 (1348) 正月、楠正行、四条畷に戦死。後村上天皇、吉野より賀名生に移る。

観応元年 (1350) 龍泉、三聖寺首座となる。「殿前の菩提樹を見て感有り」の作。

足利尊氏・直義兄弟の不和続く(観応の擾乱)。

二年 (1351) 五月、龍泉は帰朝せる性海靈見に虎関の伽梨を渡し遺命を伝える。

三年 (1352) 二月、足利直義毒殺?される。
六月、光厳、光明、崇光の三上皇、賀名生に移られる。

文和二年 (1353) 「癸巳春種菊」「癸巳歳大風後還松山修破屋」の作あり。

六月、楠正儀ら京都に攻め入り、足利義詮近江に走る。

三年 (1354) 「甲午歳歴羈旅感而作」の作あり。

三月、三上皇河内の天野山金剛寺に移る。

四年 (1355) 「乙未夏六月不雨云々」の作あり。

延文元年 (1356) 「丙申中秋云々」の作あり

三年 (1358) 十二月八日、円通寺住持龍泉上表し「元亨釈書」の入蔵を請う。

五年 (1360) 夏、龍泉は万松山承天寺に住す。冬、舟を買い尾張に向う。

六月十日、「元亨釈書」入蔵の勅許あり。

六年 (1361) 「舟中元日」「自万松還瑞松口占」の作あり。
十二月、南朝軍、京に迫る。

貞治三年 (1364) 正月、無比軍況ら「元亨釈書」を刻す。
八月廿八日、龍泉京の万寿寺住持となる。

四年 (1365) 「乙巳仲春入内口号」の作あり。
七月十九日、円通寺を諸山位とする。

十二月十一日、龍泉海蔵院で示寂。

(二)

略年譜でわかるように、龍泉令淬の詩文集を「松山集」というのは、彼が掛塔し或は住持した寺院に因んで命名しているのである。曰く瑞松院、万松山、円通広脇寺、万松山承天寺。瑞松院も、龍田師見に宛てた書簡に、

某白、龍田座元足下。好兄之発大元行也、予先住抛尾之松山焉。

と記して、松山と称している。そして龍泉は「送知幾禅者」の七絶で、

松山所有するは只だ風月、松山所有只風月

と詠じて、松山の二字に清風明月の詩心を籠めているのである。

『松山集』(五山文学全集第一輯に所収)の内容を分類してみると、

(1) 偈頌 五百五十五首 (七言律詩一首のほかはみな七言絶句)

(2) 賦 二首

(3) 書 十一篇

(4) 銘 五篇

(5) 説 六篇

で、七言絶句がその大部分を占める。彼の師の虎関師鍊の詩文集『濟北集』は、『松山集』の三倍以上の分量を有するが、詩偈と文との比率は『松山集』と逆である。では、龍泉の方が虎関より詩藻が豊かであつたのだろうか。彼自身は、

才短なれど吟多く錦囊に挑む(皇天龍和尚)

と述べている。彼の作品を分析し味読すれば、この述懐が単なる自卑の語でないことがわかる。一首だけあげてみよう。

藤尚書の「隠を求む」の韻に答ふ

百年の礼楽 尊官に属し

百年礼楽属尊官

名政 人に薫りて猛寛と称せらる

名政薰人称猛寛

堂下 幸ひに槐を植うる地を余す

堂下幸余植槐地

門に当って 楊柳看るに堪へず

当門楊柳不堪看

まだ大臣に昇進する余地があるのだから、別離を象徴する楊柳を見るに堪えられません——という意味の詩で、承句の「猛寛」は「春秋左氏伝」昭王の、

仲尼曰(中略) 寛以濟猛、猛以濟寛、

を典拠とする。「猛く厳しい態度によって、寛大な政治によって生じる民心の弛みを救う」という意を含ませようとするのだろうが、猛寛は詩語としては生硬であるのを免れぬ。師の虎関は、

詩は熟語(古人もよく使つて熟した語)を貴びて生語を賤しくすれど、

「松山集」解釈と鑑賞

上才の者は時に或は生語を用ひて句意豪奇なり。(『濟北集』卷十 一)

と述べているが、龍泉はこの賤しめられた生語(ここでは猛寛がそれに当る)を駆使し得る上才であつたろうか。

(三)

龍泉令淬の詩の特色の第一は、日常の些細なものの中にも仏道の真理を見ようとする心意が強いことである。言い換えれば偈頌的であるということ、それは一步誤れば抹香臭くなり、蔬筍(そじゆん)の気芬々たる作品に墮す危険性がある。

雪を煮て茶を煎る

雪花点ずる処 竹炉紅く

雪花点処竹炉紅

蟹歩(かま)の声消ゆ 蟹眼(かま)の叢

蟹歩声消蟹眼叢

一たび神通に上れば 小々に非ず

一上神通非小々

半升の鑪裡に 春風を煮る

半升鑪裡煮春風

これは茶釜の底から沸き出る小泡に、モナド的世界を見る道人の観察である。

梨子

花落ちし春梢に 白雪乾き

花落春梢白雪乾

実垂るる秋朶は玉霜の団

実垂秋朶玉霜団

修因感果も亦た是の如し

修因感果亦如是

咬著すれば分明なり 牙齒寒し

咬著分明牙齒寒

この詩は前対の技法を用いて、春の梨花と秋の玉実因果の理を徹見する。起・承句は事法界（眼前の現象的世界）をうたい、転句は理事無礙法界（真理の世界と現象世界が一体不二である世界）を看取しており、結句では作者は梨の実を咬み嚼いて事々無礙の世界（色即是空、空即是色のあるがままの世界）を自己の腹中に収めんとして、花紅柳緑の境を詠い得ている。これらの作品は詩としてロマンが欠けるのが難点であるかも知れない。しかしそう訓むのは俗人の俗解であって、龍泉令淬にとつては、そういう批難も「我関せず焉」であらう。

蚯蚓

坎中の天地 一封疆

稿壤と黄泉 興味長えなり

躁進由来我が事に非ず

他の蟻蟹（どろがに）の乱れて

相ひ忙しきを笑ふ

坎中天地一封疆

稿壤黄泉興味長

躁進由来非我事

笑他蟻蟹乱相忙

土中の小動物を見ても、直ちに人間界の超俗と、そして出世争いとを看取する龍泉であった。しかし、自然界を活写する詩句の行間に、自己の心情や宗教的眞実を響かせるのなら詩味も深いであらうが、泥にまみれて蠢めくみみずや泥がにを、すぐ人間界に短絡的に結びつける所に、強い蔬筍の気を漂わす憾みがある。

龍泉の詩の特色の第二は、身辺の小事を題材に詩作することである。「傀儡」「豆粥」「帽子」「剪刀」「兎」「蜘蛛」「蝸」などはロマン溢れる唐詩には見られぬ詩題であり、散文的な宋代になってよく吟じられた。それは師の虎関師鍊ゆずりの詩風である。「醬」「狸」「蝶」

「木屨」「錮鈍」「長春花」「烹雪煎茶」などは、「濟北集」「松山集」何れにも見られる詩題である。ひとつ師弟同題の作品を並べてみよう。

木屨

虎関師鍊

斤斧勞すと雖も 彫琢無く

斤斧雖勞彫琢無

身を奮って幾度か泥塗に入る

奮身幾度入泥塗

謝公は東山の上を識らず

謝公不識東山上

欠齒の当門 老胡を笑ふ

欠齒当門笑老胡

（訳）苦勞して切り出した木で（作った下駄だが）細工を加えず

（履いて）ひよいひよい身を跳らせて泥道を渡る

（浙江省臨安の東山に隠棲した）謝安は東山の頂上を識らない

（前歯を折った下駄は登山によいのだが謝安はそれを知らず）私は欠けた前

歯で達磨を笑う

「後漢書」の五行志に「延熹中、京都長者、皆著木屨」とあって、木屨（下駄）は都の長者の象徴であった。承句の泥塗は名利に汚れる俗世を暗喩するのであらう。それに反し、晋の謝安は俗世を避けて東山に高臥したのだが、東山に住みながら東山の頂上を識らぬというのは、本来具有の自己の仏性に気付かぬ隠者を皮肉っているのである。また、これは「東山水上行」という、動静二相を超越した公案を念頭においての転句でもあらう。「無門関」四十一に「欠齒の老胡、十方里の海を航して特々として来る」という文があり、達磨は菩提流支等に憎まれて毒殺されようとし、その為に歯が抜けたと伝えられている。登山に便利なように前歯を折った下駄をはいた虎関は、欠齒の達

磨に笑いかける。欠歯が欠歯を笑う——自己と達磨と一如の境を結句で詠じているのだが、全篇を通じて、大らかな虎関のユーモアを感じさせるではないか。龍泉の作はどうか。

木履

龍泉令淬

旧日の草鞋の跟を踏躑し

踏躑旧日草鞋跟

一著 孤高 嶺巔に到る

一著 孤高到嶺巔

欠却せる当門 板歯を看れば

欠却当門板歯看

祖師は我が脚頭辺に在り

祖師在我脚頭辺

△訳▽これまでの草鞋をはきかえて
下駄をつけ、ただ一人山頂に登る

欠けた前歯をみてみると

祖師達磨は自分の足元におられた(脚下照顧)

龍泉の詩は真摯な仏教徒の作品である。「孤高」「一著」の用語もさることながら、特に結句に於て両者の作品の個性的差異が顕著に表れている。同じく宋詩的に身辺小事をうたうのだが、師弟二人の詩風には大きな距りがある。

特色の第三は、龍泉は悲しみの情をよく二十八字に表白することである。悲哀を抑制せずうたうのは非宋詩的であるのだが、(吉川幸次郎『宋詩概説』三四頁以下)龍泉の悲哀の原因は何であったのか。

関西又乱ると聞く

誰か防意城の如しと解するを知らん

知誰防意解如城

林下 身閑かなれど事驚き易し

林下身閑事易驚

風は西南より渭北に來り

風自西南來渭北

【松山集】解釈と鑑賞

愁腸未だ必ずしも秋声に在らず

愁腸未必在秋声

△訳▽「私欲を防ぐこと城のように(堅く)」と誰が言ったのか。

禅林に住む私は閑居していても 事毎に心を痛める。

(戦乱の) 風評は西南から洛北にきたり、

悲しきは秋風の音だけとは限らないのだ。

起句は朱熹「敬齋箴」の「守口如瓶、防意如城」に拠っている。

禅林で超俗閑静に暮す龍泉だが、はっと胸つかれ悲愁の思いを起させるものは戦火であった。起句は整齐でない。承句の「林下」は、官寺の「叢林」に対する語で、私刹の小寺をいうのであり、龍泉の(官寺に出住し得ない?)微妙な心理を写す用語か。このほか「松山集」には、「乱後見旧址感懷」「休征」など戦乱を詠う作品があり、後醍醐天皇の庶子といわれる龍泉が戦火に一喜一憂するのは、教義や論理を起えた血肉の情からであった。義堂周信のように、

興亡 禅僧の眼に上らず(次韻東光弔大塔兵部卿親王)

遊人興亡の事に管せず(題後鳥羽帝祠)

という心境にはとてもなれなかった。

蕨を采る

烽候 柝防 金鼓頻りにして

烽候柝防金鼓頻

絮飛び花落つ 乱離の春

絮飛花落乱離春

偶然今占む 首陽の景

偶然今占首陽景

山中窮餓の人と作らんことを恐る

恐作山中窮餓人

△訳▽のろし、拍子木、鐘太鼓が頻繁に鳴り

絮や花がひらひら落ちる憂いの春

たまたま（伯夷叔斉が骸を取って餓死した）首陽山の景色を見て、私は山中で飢え苦しむのではないかと心配する。

南朝皇統の血を稟ける彼は、戦乱のニュースを耳にしてどんなに胸を痛めたことか。北朝や足利幕府を大權越とする聳寺に掛錫して、自己の地位の不安定を恐れたことであろう。結句は采藤―首陽山―餓死の、単なる古史の想起ではなく、生々しい現実の不安を詠じているのである。

自己の出生にまつわる不安を心底に持つ龍泉は、「断腸」の語を屢々用いる。

- ① 屠門大嚼秋風裡 腸断。長安落葉頻（賀源威衛能治関西）
- ② 等是簷頭雨滴処 愁人認作断腸声（寒雨）
- ③ 即今巴峡月明外 未必聴声也断腸（猿）
- ④ 筆下風雷默中語 断腸未必在猿声（謝広庵老見次博多海浜韻）
- ⑤ 声前曲子知音少 葉々迎秋空断腸（種梧桐）
- ⑥ 手分滑樹帶春処 腸断。江雲欲莫辺（不逢云々）
- ⑦ 才短吟多挑錦囊 山中風景說難当 主人眼裡渾閑事 游客時々自断腸。（呈大龍和尚）

傍点の語は、彼の断腸が主観的内発的なものであることを示している。龍泉の詩の一つの特色は偈頌的色彩の強いことであった。ということは、彼が真摯な禪徒であったことの証左である。禪徒というものは世俗の事に一喜一憂することなく、只管に道を求むべき者である。偈頌をよくする龍泉にとって、断腸事といえば已事を究明し得ぬ迷蒙、扨拭しきれぬ煩惱魔であるはず。しかるに前述の①②③は落葉と雨

声の寂莫たる自然に愁え、④⑤は猿声に悲しみ、⑥⑦は友人との別離を傷み、⑧に至っては佳景をうまく吟じ得ぬ才能を哀しんでいるのである。

才能といえはこんな作品がある。

拙才

人は皆巧を乞ひて天を望み去るに 人皆乞巧望天去
 我は只だ機を忘れ甕を抱いて来る 我只忘機抱甕来
 珍重す 山中殊雁の者 珍重山中殊雁者
 扶疎長揖し 斧斤交はる 扶疎長揖斧斤交

△訳△人はみな手芸の上達を祈って天を望むのに
 拙僧はただ無心に 甕に銀河の水を汲んで抱いて帰る
 珍重すべきは 山中のこの仲間はずれのわしなのじゃ
 木の枝が広がり垂れて 木こりが入ってくる。

「拙才」と題しはするが、なかなか技巧をこらした作である。いわゆる前対の技法を用い、承句の忘機は、心の働きを忘れて無心になる、という禪心の意だけではあるまい。起句の乞巧との対で考えると、「詩作の上達を願う心をやめる」とも解せられる。転句の殊雁は恐らく龍泉の造語であろう。雁という鳥は長幼の序を守り仲間の結束が強く、また雁王という語は仏の異名となっている。故に殊雁を「長幼の序に従わぬ者」、仲間はずれの僧の比喩と解釈してみた。畢竟、殊雁者は龍泉自身なのである。結句の長揖は会釈のことだが、功成りても爵を受けず、長揖して田廬に帰る。（左思「詠史」）
 風塵の外に高踏し、長揖して夷齊に謝す（郭璞「遊仙」）

の用例から、脱俗の意も含んでいる。また『莊子』逍遙遊に、

斤斧（きんこ）に天（あま）られず、物に害せらるる者（ひと）も無し。用ふべき所無きも、安（やす）の困苦する所あらんや、

と無用の、つまり拙才の大木の、無用の用、を説いているが、扶疎（木の枝が四方に広がるさま）し長揖する（枝が垂れる）大木にも、龍泉は自己を投影しているのである。

まえに「断腸」の語の頻出を述べたが、ついでに「一」の字の多用にも触れておきたい。『松山集』五百五十七首中、実に四十八パーセントに当る二百六十八首に「一」の字が用いられているのである。龍泉はこの「一」に、①数量の一、②わずかの数というほかに、③北斗以南元一人（上南朝主）の如く絶対を表し、④門掩清風一老禪（清風庵は孤清、⑤天地一囊難置錘（賀見性満住三聖嗣先師）や舜月光風只一糸（兼住）は全即一、一即全の境地を表すなど、枚挙に遑がない。むかし俱胝という和尚が何を問われても一本の指を立てて、「吾れ天龍の一指禪を得てより、一生受用して尽きず」と述べた、その一本の指にも似た龍泉の「一」字である。

龍泉令淬の詩風の第三の特色を述べているうちに、つい知らず識らず横道にそれてしまった観があるが、南北朝動乱期に彼の置かれた立場は甚だ微妙且つ不安定で、それが心情的には自尊と自卑の分裂となり、ひいては作品の巧拙の不統一となって表れるのである。

定光寺の齊長老に寄贈す

自ら浮名の去留を礙（また）ぐるを笑ひ

雲を瞻（み）て幾日か林丘に臥す

自笑浮名礙去留

瞻雲幾日臥林丘

『松山集』解釈と鑑賞

定光の古仏 今猶ほ在りて

定光古仏今猶在

招手し誰をして點頭を解せしむる

招手教誰解點頭

曆応四年（一三四一）に建立された尾張の応夢山定光禪寺の開山平心処齊（一二七八―一三六九）に贈った七絶である。起句で浮名を笑うのは、龍泉自身浮名を意識しているからであり、その自意識が一そう出処進退をさまたげるのである。浮名を笑いとばして否定し去るなら、誰が何と云って招こうと、林丘に幽居し続ければよいのに、「幾日か」という語はどうしたことか。「幾日」の二字に彼の矛盾的俗心がちらりと露呈している。「蚯蚓」で「躁進（浮名の為にあくせくすること）由来我が事に非ず」と言い放った彼ではなかったか。

沼・漚二弟の遠く来るに謝す

客舎窮村 已に一期

客舎窮村已一期

幾番か夢に和して京師に到る

幾番和夢到京師

竹松歳晚恙無（つつが）きを知るも

竹松歳晚知無恙

岩下の残梅 春なほ遅し

岩下残梅春尚遲

前作で「林丘に臥す」と悠々たる日々を叙しながら、ここでは「窮村」という語を用いる。「栽松」と題して、「甘んずる林間白髪の僧」と詠じた龍泉であるのに、ここでは京に帰りがたっている。勘ぐって解すれば、彼は「残梅」に自己をなぞらえているのではないか。「春なほ遅し」の語に作者の不満を感じることが出来る。不満といえはこんな作もある。

不満

家常鉢を添ふるは何の過か有らん

家常添鉢有何過

婆子還た言ふ 「生を厭ふ無かれ」と 婆子還言無厭生

大海は終に能く足るを知るべく 大海終能可知足

阿師の肚裡 幾時か平かならん 阿師肚裡幾時平

『正法眼蔵』五十九の「家常」に、仏祖意句は、仏祖家常の茶飯なり、という文がある。起句は此れに拠っているのである。また、一老婆が妙齡の女子に命じて、禅僧の庵主に飯を給侍させ、そして抱きつかせた「婆子焼庵」という逸話があるが、承句はこの逸話を踏まえている。素直にこの詩を読むと、阿師（和尚さん。少し軽んじた呼び方の不満を誨えているようであるが、自分自身に対する自戒の作とも取れるのである。その不満の原因は、岩下梅春尚遲の作と読み合わせてみると、鞞寺（京の官寺）に出世し得ぬ点にあつたのではないか。

龍泉令淬の詩の特色の第四は、漂泊の旅をよく吟ずることである。しかし略年譜を見てもわかるように、西は博多の承天寺、東はせいぜい尾張どまりで、中国大陸はおろか鎌倉にも足跡を印していない。

雨夜に瀛蔵主を憶ふ

浮跡 両萍 天の一涯 浮跡両萍天一涯

風に約がひて幾度か合ひ仍ほ開く 約風幾度合仍開

単衾 幽独寒牀の上 単衾幽独寒牀上

愁ひ逐へど簷頭に滴 数 来る 愁逐簷頭滴数来

転・結句を読むと、艶詞と誤解しそうな作品であるが、起句で龍泉は自分の人生を浮き草にたとえる。

客中結夏に値ふ

壁頭の杖子は本同参 壁頭杖子本同参

去くも住まるも自由 雲一翕 去住自由雲一翕

土外に身無く 身は是れ土 土外無身身是土

山川何処か伽藍ならざらん 山川何処不伽藍

入訳 壁ぎわの錫杖は私の仲間、行くも留まるも自由で 雲はわが椽。土のほかに身は無く、身と土とは一如、山も川もすべて私の修行道場（寺）なのだ。

結句は蘇東坡の有名な、溪声便ち広長舌 山川寧ぞ清浄身に非ざらん（谷川の音は仏の説法 山の姿は仏の御姿に外ならぬ）と同一の境地を表明すると共に、旅こそわが人生」と吟じているのである。しかし、

点綴浮雲養病身 梳粧疎柳送残生（病中值中秋）

は、徒勞の旅に疲れた前半生を悔恨しているかのようなのである。病気が弱気にさせているのであろう。このほか、

甲午（文和三年）の歳、連りに羈旅を歴し、感じて作る

東に帰り西に笑ひ共に閉関し（旅に苦しみ） 曉鼓晚鐘行路難し

手裡の山藤（つえ） 閑なり得ず 誰か風月を将って蒲団に属さん

（風月の中で座禅する）

をはじめとして、『松山集』には旅の作品が多く収められている。

道中感有り

多少の路人相ひ後先し 追隨稍や久しうして歎妍を作す 一朝 彼々共に手を分ち 恋戀忘れざること旧縁の如し

途中の離合幾州の人か 郷話郷音俱に均しからず 説得して各

ミ家邑の美を誇り 公は是非 公は是と誰をして陳べしめん

旅は道連れ世はなさけの諺の通り、同じ街道を行く他人どうしが、袖触れ合うも他生の縁と、方言まる出してお国自慢をしている道中風景を活写していて、龍泉の作品の中では明るくてめずらしい。しかし、

道中感有り

田廬山舎 都て相ひ似て

田廬山舎都相似

我をして生を寄するに安ぞ存するに耐へん 令我寄生安耐存
道に在るは唯だ恰も民俗野にして 在道唯恰民俗野

行く行く自ら笑ひ 荒村に落つ

行々自笑落荒村

都、令、安、恰の用字が作品的に散文的にし、しかも余り適切な用法ではない。前二作は健康的な笑いを誘う街道風景であったが、これは、いなか小屋にどうして安住し得よう、と言う承句に龍泉令淬の本心が露呈しており、どうとう儂も荒れはてた村に落ちついた、という結句は、彼の自嘲的なにが笑いなのである。

舟中の元日

方^{まさ}に是れ乾坤水上の萍

方是乾坤水上萍

浮生定め無き一閑人

浮生無定一閑人

舟中更に新年の法有りて

舟中更有新年法

延文第六春を載せて起つ

載起延文第六春

延文六年（一三六一）の元日にも、龍泉は舟の中で、浮生定め無し、とうたう。しかしさすがに晩年ともなると、残生の愁も断腸も、自笑もなく、一閑人に安住している。年輪の然らしむるところ

なのか。

最後に、彼の絶筆に近い作品を読んでおこう。

乙巳（貞治四年）仲春 入内し口号す

山中に落魄せる野盤の僧

山中落魄野盤僧

屐子 風高く紫宸に上る

屐子風高上紫宸

錦宸 黄独の気を留むるを恐るれど

錦宸恐留黄独氣

衲衣更に碧桃の春を帯ぶ

衲衣更帯碧桃春

入内した所は、後光厳帝の皇居であろうか、それとも御兄弟といわれる後村上帝の吉野行宮であろうか。起句と対照的に考えると前者のように思える。龍泉令淬はこの年の十二月十一日に示寂した。生年は不明であるが、延文五年（一三六〇）万松山承天寺に住した年を五十歳と仮定すると、円通寺の虎関師錬に侍したのは十四五才、示寂したのは五十五才頃ということになる。龍泉は最晩年の自己を、落ちぶれて志を得ず野宿する僧と自覚自認する。しかし、それはもう自嘲自笑ではない。承句の風高がそれを証明する。黄独氣（土芋のおい）も、碧桃春（仙人のたべる長寿の桃）に裏打ちされた謙称なのである。唐の徳宗が懶瓚の高名なのを聞いて、勅使を遣わして招くと、懶瓚は牛糞を燃やして芋を焼いて、返事もせずに食べていたという禪話を想起させる承句である。この作はいわゆる後対の技法を用いており、「三体詩」で周弼が、

此の体（後対の詩体）唐人の之を用ふること亦た少ななり。と述べるように、唐詩には少ない技法であった。

以上、大まかに龍泉令淬の詩風を探ってみたのであるが、(1)求道的

偶頌的であること、(2)身辺の小事を吟詠すること、(3)叢寺に出世し得ぬ不満を蔵して、悲哀・断腸・憂愁をよくうたうこと、(4)浮き草の如き生涯を詠歎していること等は、ひとつひとつを取り上げてみると、何も彼一人に限った特色ではない。これら不統一の、時には矛盾せる要素を『松山集』一卷に包含している所に、彼独自の詩風があるのであり、その根柢には、南北朝の動乱期に、悲運の南朝の血を受けて生きたという、血肉の業縁が秘められているのである。

龍泉令淬の自己矛盾的統一的詩風の、矛盾の契機が彼の出自にあるとするなら、統一的契機は、東福寺派の禅僧としての修行にあった。

(四)

龍泉令淬が後世に遺した文学的足跡は、『松山集』のほかにもう一つ、『海蔵和尚紀年録』の編纂があり、この『紀年録』の記述の随所に、彼の海蔵和尚(虎関師鍊)への敬慕の念がにじみ出ている。『松山集』の中から虎関に捧げる作品を読んでみよう。

先師の塔を礼す

失脚す 吳王城畔の途	失脚吳王城畔途
灼然と逢著す 老烏菟	灼然逢著老烏菟
千年朽ちず 黄金の骨	千年不朽黄金骨
那箇の風顛捩鬚を解する	那箇風顛解捩鬚

起句は自分の失意の時代を回想しているのである。烏菟は虎の異名で、勿論虎関師鍊をさすのであるが、左思の「吳都賦」の「烏菟之

族、犀兕之党」の用例をみると、『吳王城畔途』は烏菟の縁語として用いられており、大覚寺統の血脈を受けた龍泉が、皇居を望み見て失意の状態にあった時、虎関和尚に参侍し得たことを前半でうたっているのである。転句は郭隗が燕の昭王に、死馬の骨を五百金で買って千金の生きた馬を得た話を説いた故事に拠っており、黄金骨は秀れた人材のことで虎関をさす。捩鬚は虎の鬚をなでて危険を冒す意と、他人の鬚を撫でて親愛の情を示す意味と両方を含む。一首の訳は、都大路で前途を見失っていた時

虎関老禅に逢って脚下照顧する事が出来た
先師の秀れた禅才は永遠に朽ちることなく
どこの気狂い奴が親愛の情を示すのか
ということになるうか。また、

雲蔵主が四偈を賦して先師を挽む韻に答ふ	
焦尾の烏菟 睡り正に濃く	焦尾烏菟睡正濃
冥々たる碧霧 山中に乱る	冥々碧霧乱山中
時ありて一嘯し林壑を出れば	有時一嘯林壑
海蔵の波瀾 疾風に駕す	海蔵波瀾駕疾風

△訳▽尾を焼いて人と化した虎は深く眠り(虎関の死をいう)
立ちこめた霧は山中に乱れ流れる(法嗣の戸惑いと悲しみの象徴)
時に(目ざめて)一声吼えて林や谷から出ると(海蔵門派の再興)
龍宮城の大波は風によって逆巻く

は師の法灯を高く挑げんとする決意を示し、
先師を哭す

看來れば物々惣すべて前に依り

看來物々惣依然

鳥は深木に宿り 雲は碧天

鳥宿深木雲碧天

当日 淵明 注脚を加ふ

当日淵明加注脚

「無心に岫を出で倦みて還るを知る」と 無心出岫倦知還

△訳▽ながめてみると物は皆（先師の生前と）同じで

鳥は林深く宿り 雲は青空に浮んでゐる

むかし陶淵明は（鳥と雲とに）注釈を下して

雲は無心に以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦んで還るを知る。（帰去来辞）と
うたった。

先師虎関の死の悲しみをつきぬけて、無心の境をうたう龍泉であつた。

少し後の時代のことだが、

詩ヲ云ニモ淵明ハ第一達磨、直指見性の処ヲ悟タモノゾ。（湯山聯句抄）

抄）

というように、陶潜は悟達の詩人として五山禅僧に尊敬されていた。

但し、虎関は陶淵明のことを、潜ひそや介潔冲朴の士と謂ふべけれど、大賢には非ず。詩も其の人の如し、『濟北集』卷十二と述べて、絶対視していない。

このほか「先師舍維流舍利」「与諸友整先師遺稿」などを詠じて、

深く師を敬慕すればこそ、龍泉は虎関の遺志を継いで、達磨忌の普及発展と、『元亨釈書』入藏に尽力するのである。即ち公武の信頼の篤い玄慧に「胎独醒老書」を送って、本朝の達磨忌普及の為に幕府の説得を頼む。また、

虎関ノ書記ノ位デ、東山ノ師子谷ト云所ニ濟北院ト云ヲカマエテイ
ラレタゾ。ココデ元亨釈書ヲ作ラレタゾ。諸家エ目録ヲコワレタ

【松山集】解釈と鑑賞

ゾ。ソノ内嵯峨ノ一派サカリニシテ、虎関ガ伝ニノセズトモカクレ
ナイ事ト云テ目ダサヌゾ。夢窓ノ伝ナリゾ。（玉塵抄）

というように問題点はあつたが、『元亨釈書』が日本最初の僧という偉業に変わりはなく、特に龍泉は、(1)『春秋』『史記』は複数の人の手に成つたが虎関は一人で書いたこと、(2)中国の訳経は多くの僧が従事したが、虎関は一人で日本の古記を漢文に翻したことを誇りとして、(上海蔵先師書)『元亨釈書』入藏を北朝の朝廷に上奏した。その奔走が効を奏し、

延文庚子（五年）六月に至り、旨有りて蔵に入れ頒行す。蓋し其の

徒円通の長老令淬の請によるなり。〔空華集〕十九「東福寺海蔵院重刊

元亨釈書化疏）

とあるように大蔵に入れられたのである。龍泉令淬は大いに喜び、さつそく次の偈頌を作った。

皇帝勅して釈書を大蔵に入れたまふを賀し奉る

塵外の摩尼人識らず

塵外摩尼人不識

九天に推出すれば転た玲瓏

九天推出転玲瓏

君王の宝 価を酬むかい難く

君王之宝難酬価

収めて龍宮海蔵中に在り

収在龍宮海蔵中

△訳▽塵世を超越した如意宝珠のことを人は誰も知らない
高い大空（九重の宮中の大蔵）に出すとますます美しく輝く
帝の宝として無上の価値があり
龍宮の宝蔵（大蔵及び海蔵院の意を含める）に収められる

起句は永嘉玄覺の『証道歌』の「摩尼珠人識らず、如来蔵裡に親しく

【松山集】解釈と鑑賞

「収得す」に拠っており、摩尼珠は仏性を意味する。故に転句は、九重にいます帝みかどの見性成仏をも願っているのである。なお「元亨釈書」が大蔵に入れられると、虎関の法嗣は言うまでもなく、五山の諸尊宿が入蔵を賀して偈を作り、無比单况（海蔵院々主で、この人が龍泉に勧めて上奏文を書かせたという）がそれら五十三首を一詩軸とした。「獅子絃」と称せられたのがそれである。